研究部だより

令和5年12月発行　ＮＯ．１３

研究主題
「児童生徒が学びをつなぐ」
教育課程の編成

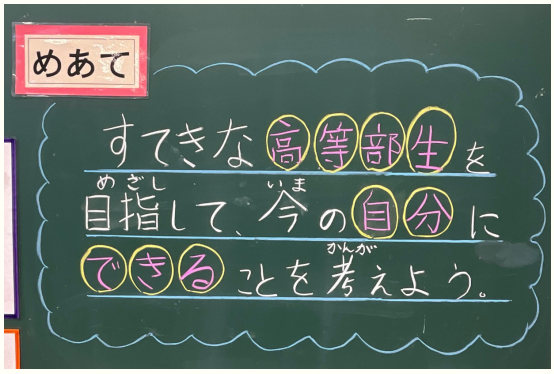
中学部　全校授業研究会実施

中学部２年の職業・家庭科で全校授業研究会が行われました。対面参加者、オンデマンド参加者など合わせて２２名の参加がありました。今回は、当日の様子を中心にお伝えします。

中学部２年　職業・家庭科　中学部と高等部の違いについて～今の自分にできること～

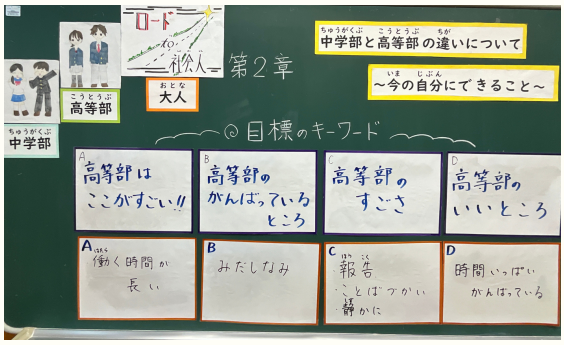
＜授業者のしかけ＞
めあての提示の仕方
～めあてを共有するために～

＜生徒の様子＞
・めあての一部を穴埋めで提示することで、空欄に何が入るだろうと考えたり、黒板やホワイトボードの掲示物をよく見たりして全員でめあての共有ができた。



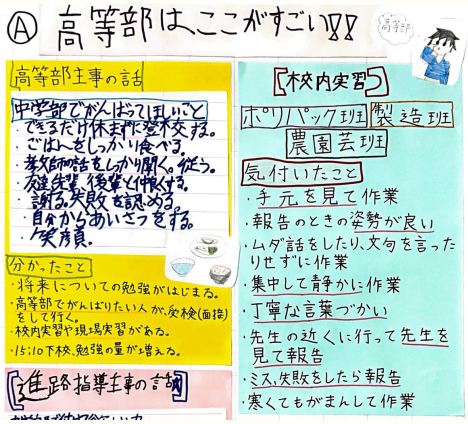
＜授業者のしかけ＞
キーワード
～前時の振り返りとめあての具体化～

＜生徒の様子＞
・前時までにグループでまとめた際のキーワードを提示してそのキーワードについて具体的に質問することで、「集中して作業」や「報告の仕方がよい」など目標を考える上で参考となる内容を話した。



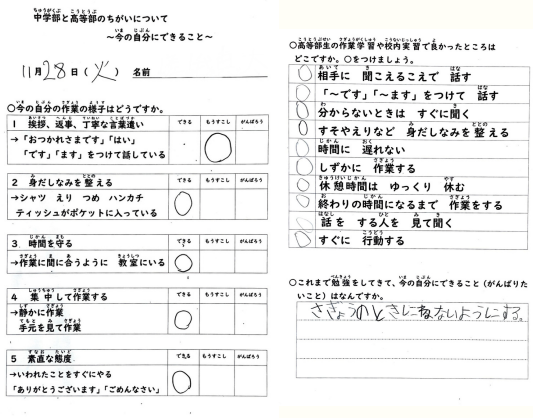
＜授業者のしかけ＞
目標を考えるためのヒント
～困ったときに手掛かりにできるように～

＜生徒の様子＞
・パワーアップ週間での作業の様子やグループで作ったまとめの模造紙、中学部作業学習５箇条をタブレット端末に入れていつでも見られるようにすることで、タブレット端末の資料を見ながらワークシートを書くヒントとしていた。



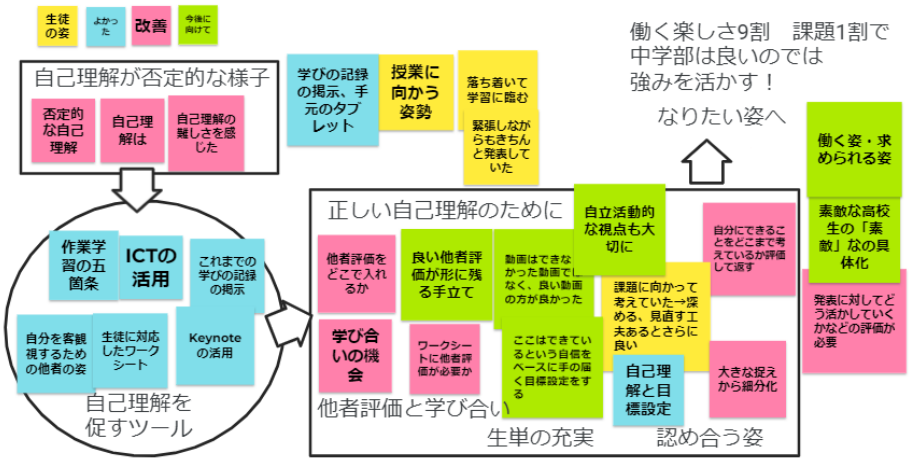
＜授業者のしかけ＞
ワークシート
～一人で考えて、記入できるために～

＜生徒の様子＞
・文字を書くことが苦手な生徒には選択肢から選んで答えられるようにすることで、自分の時間いっぱい課題に向かっていた。



研究会の協議から

学んだことを日常生活につなげるための教師の支援、手立てについて



【協議で話題になった主な内容】
- タブレット端末を活用し、それぞれが考えていた。
- 実態に応じてワークシートを準備していた。
- 自己理解と他者評価をどうするべきか。
- 目標と日常生活をどのようにしてつなげていくか。

【今後に向けて】
- 作った目標を短期間で振り返ることができる状況を検討する
- 他者評価、評価の方法を検討し自己理解を育むことができる支援をする
- 家庭と連携し、できることを生活場面とつなげる
- 学部職員間でも生徒の目標を共有し、適切に評価をする

講評　秋田大学教育文化学部　教授　藤井　慶博　先生

- 本時の授業の問い「素敵な高等部生を目指して、自分にできることは何か考える」には、いろいろな学習の要素がある。「問いの意味理解（生徒たちが共通して理解できていたか）をする力」「今の自分と高等部を比較する力」「これまでの学習を覚えていて、それを再生する力」「自分を客観的に見る力」「問いや答えを言語化する力」がある。難しい要素もあったが、生徒たちは淡々と授業に取り組んでいた。
- ワークシートの評価欄を見ると、高い自己評価をしている生徒が多かった。理由を考えてみたが、生徒自身が中学部の学びや生活で「自分は精一杯がんばっている」という思いがあるのか、それとも高等部生と比較してみても「自分はできている」と感じたのか。授業者から「他者から注意されることが苦手な生徒たち」という話も聞いたので、それも関係あるのかもしれない。真の「自己肯定感」とは、「よいことも苦手なこと、悪いことも含めて自分は自分であって大丈夫」という感覚をもてること。この自己理解と受容が将来の社会参加の基盤となる。
- 発表場面の生徒の反応として「身だしなみ、集中して作業」「座って時間いっぱい作業」などが挙がった。これは、本時の授業の問いとつながっていたか。「中学部作業学習の５箇条」を見て、浅くなぞっただけになっていないか。
- 本時で提示された情報として、生徒自身の記憶、今まで勉強したことをまとめた模造紙、タブレット内の情報、教師の四つがあった。課題解決の方法は一人一人違うため、それらに応じたツールが用意されていたことはよかった。また、日頃からの教師と生徒との良好な人間関係があったからこそ、教師も課題解決の一つツールとなることができた。
- 学びを振り返るための手立てとして、めあてとなる「問い」がわかりやすいことが大事である。知的障害児は時間が経過していくと記憶、集中はどうしても落ちる。そこで、形成的評価と総括的評価のバランスが重要である。教師が言語化して価値付けていくことで、次の活動につなげていくことが必要。
- 「課題」という言葉が多く使われていたが、「課題」とは何なのか。目指すべき理想の姿から現状の姿を引いたものであると思うが、ネガティブな点だけが課題ではない。「今できることをここまで伸ばしたい」ということも課題になるため、そういった視点ももっていくとよい。
- 授業デザインシートを見て、「家庭や寄宿舎と連携し、～ができるようになってほしい」と書かれているのがとてもよかった。関係者の中で共有することが大事。これに地域も含めると、「社会に開かれた教育課程」につながる。
- 授業を通して「苦手なことを伝えられるようになった。」「妹に勉強を教えられるようになった」などのエピソードが得られたのは、関係者で目標・実践・評価が共有されているからだと思う。ぜひ取組を継続してほしい。
- 知的障害教育はこれまで生活中心主義だった。学習指導要領の職業・家庭科の目標を見ると、「生活」という言葉が散りばめられている。各教科別の指導で考えると、教科の特質による分類がある。職業・家庭科は生活経験を基にした教科で、「生活」との親和性が極めて高い。生活単元学習なのか職業・家庭科なのかわかりにくい部分があると思うが、学習指導要領にも生徒の実態に応じて合科的・関連的な指導を行うことが書かれている。指導要領にはあえて大概的に目標が示されている。個別最適な学びのために、弾力的・柔軟に指導をしてよいと思う。